

単収アップのポイント

- ◎しっかりとした排水対策で生育量を確保
- ◎積極的な土づくりと連作回避で生育を促進
- ◎確実な種子更新と種子消毒

基本を守って
収量増を目指そう!



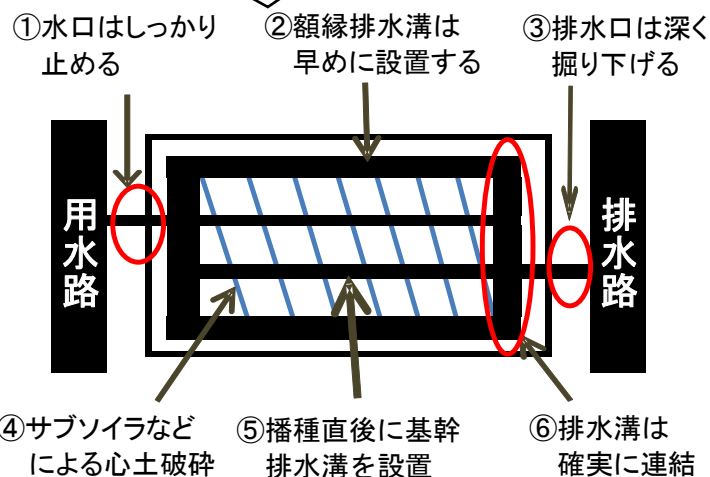
1 排水対策 ～播種前の排水対策の徹底～

大豆栽培の基本は、排水の良い圃場づくりです。
排水不良の圃場では、湿害による出芽不良や生育抑制、雑草等の発生により収量の低下を招きます。また、適期の耕起・播種作業や培土作業等にも支障をきたしますので、播種前に排水対策を徹底しましょう。

<排水対策のポイント>

- ① 用水路や水口からの漏水をしっかり防止する。
- ② 額縁排水溝の設置や心土破碎を実施していない場合は、早急の実施し、圃場の乾きを促進する。
- ③ 額縁排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への確実な連結など、速やかに排水ができるようにしておく。

額縁排水溝の設置や心土破碎は、
4月中に実施



2 土づくり

～土壌 pH を 6.0～6.5 に改良、堆肥で地力向上～

(1) 土壌 pH の改善

土壌 pH が低いと、うまく養分の吸収ができず、生育が悪くなり、収量が低下します。アルプス農協管内の土壌の 83% が pH6.0 を下回っています。
pH6.0～6.5 を目標に粒状貝化石を 10a 当たり 150～200 kg を施用しましょう。

(2) 堆肥の施用

堆肥の施用により地力が向上し、収量の増加やしわ粒の発生低下が期待できます。特に、大豆の作付回数が多い圃場では、地力が低下するので、発酵鶏ふんなどを積極的に施用しましょう。

表1 堆肥の種類別施用量の目安

堆肥の種類	牛ふん堆肥	豚ふん堆肥	発酵鶏ふん	糶がら堆肥
10a 当たりの施用量	1～2t	0.5～1t	100～200kg	1～2t

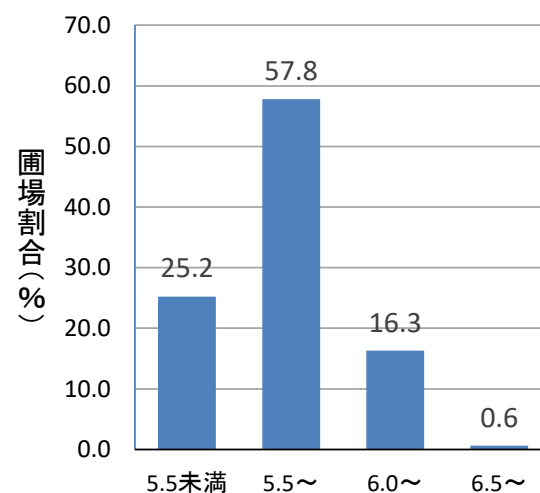


図1 JA アルプス管内土壌 pH(H30年調査)

3 種子更新と病害虫発生防止

～ 初期病害虫の発生防止 ～

種子更新は、毎年行いましょう。また、種子伝染性病害や初期害虫の発生を防止するため、薬剤の種子塗抹を行いましょう。

表2 品種別、播種時期別の栽植本数及び準備する種の目安

品種	播種時期	目標栽植本数 (本/10a)	播種量 (kg/10a) 注)	
			大粒	中粒
エンレイ	5月6半旬～6月上旬	14,000～16,000	4.8～5.5	3.9～4.5
	6月中旬	16,000～18,000	5.5～6.2	4.5～5.0
シュウレイ	5月6半旬～6月上旬	12,000～15,000	4.8～6.0	3.5～4.4
	6月中旬	15,000～18,000	6.0～7.3	4.4～5.3

表3 大豆の種子塗抹処理剤と処理法

薬剤名	処理法	対象病害虫	留意事項
クルーザー MAXX	乾燥種子1kg当たり原液8ml 塗抹	フタスジヒメハムシ アブラムシ類、タネバエ、ネキリムシ類、 茎疫病、黒根腐病、 紫斑病	塗抹後、種子を十分に乾かす。

注) 大粒(中粒)の百粒重: エンレイ30.9(25.1)g
シュウレイ36.3(26.4)g
苗立率90%として計算